

学校物語 (国吉小の巻)

一最初の校歌制定さる一  
余木 令

吉野校長は国吉小学校に大きな足跡を印した人なので、少しく長くなるくらいがあるがもうしばらく先生について語るを許していただきたいと思う。

まず校歌の制定から記していこう。

先生は校長就任後まもなく、国家に

国歌があるように

学校にもかならずその学校の特質をたつた校歌がなければならぬと考え、自分自身で作詞作曲することにした。国歌によつて国民はその志気を鼓舞され、校歌によつて生徒は自尊の精神をおのずと植えつけられるからであろう。

校長は、しちむつかしい漢書にしたしんでは古代聖賢の道を会得しようとした「かたぶつ」ではあつたが、また反面、現代的音楽、詩歌等にも格別の趣味をもち、その文学的素養は仲々に深かつたともいう。特に音楽に対しては異常な熱意を持つていたらしい。それには色々な語り伝えがあるが、いまはこれにふれる暇(いとま)はないのではぶかせてもらおう。それやこれやから判すると校長が校歌の制定に並々ならぬ情熱を傾けたのも、けだし、むべなるかなと思わざるを得ないのである。

中原の  
その名も四方(よも)に  
国吉と  
となえられたる  
わが里は

山河の形勢(けいせい)

いや広く

よそにすぐれし

そのさまを

共にうたわん

いざ友よ

これは一番である。その歌詞は残念ながら一片すらも記録に残されていない。右の一番も当時の生徒であつた人のおぼえを聞いて綴つたものであり、従つてごく一部は筆者がやむを得ず勝手に補綴したところのあるものだ。この点、故人と読者の宥怒(ゆうじよ)を請わなければならない。

そもそも明治時代には数十行にも及ぶ歌詞は決してめづらしいものではなかつた。鉄道唱歌、電車唱歌等はそのよい例であり、学校の寮歌集をめぐつても十三番、十五番という、ちよつとやそつこのことでは覚えきれそうもない長いのをよく見出すことができる。この校歌も国吉町内の地名を適宜に按配挿入し、これに郷土史の一コマをも織りこんだもので、数十行にも及ぶ一大叙地詩(こんな言葉は実際にはない)であり、また叙事詩でもあつたと思われ。最初一番の文句から全篇を想像すると、校長の性格をよくあらわした雄渾(ゆうこん)な歌詞とみてよきほうである。やはり一文は人なりぬのたとえ通りであろうか。

夷隅の部(こうり)